

■はじめに

ISAK（インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢）の第 1 期生の卒業式が 6 月 11 日に行われました。ISAK は「世界を舞台に変革を起こせるようなチェンジメーカーを育てる」という目的で、3 年前に開校したインターナショナルスクールです。卒業生の声から、ISAK には「自主性」が尊重され、「何でもチャレンジできる環境」が整い、「学ぶ意味を問い続ける」という姿があったことや、学びを生かして母国や世界のチェンジメーカーになりたいとの思いが伝わってきました。ISAK のように高い理念を掲げ「教室での学びを社会につなげる」ことが大切であると思います。

■教室と社会がつながった学び——葛の料理教室（食育フェスタ）から

皆さんこれは何か分かりますか。葛の根っこです。葛餅が葛からできているのをご存じの方は多いと思います。でもその原料が根っこだと知っている人は意外と少ないかもしれません。

6 月 4 日にはぐくみセンターで行われた食育フェスタで、小学生を対象にした料理教室を開催しました。「奈良の食材を使った朝食づくり」をテーマに、葛を取り扱う天極堂から講師を招き、葛を使った料理に取り組むという内容でした。講師の方は料理の手順を説明する前に葛とはどういう植物なのかを子どもたちに話されました。そして、この葛の太い根っこを見せた瞬間、枯れ木のように見えるその姿に、子どもたちが大きな歓声を上げたのです。



天極堂は出前授業で、吉野本葛の素晴らしさを伝えるだけでなく、「葛から子どもたちの未来を考える」というミッションを掲げ、顕微鏡を使った説明もしています。教える側が学びと社会との結びつきを認識し、子どもたちに分かりやすい具体的なもので提示することで質の高い経験となり、教室での学びがリアリティのあるものになります。

天極堂は出前授業で、吉野本葛の素晴らしさを伝えるだけでなく、「葛から子どもたちの未来を考える」というミッションを掲げ、顕微鏡を使った説明もしています。教える側が学びと社会との結びつきを認識し、子どもたちに分かりやすい具体的なもので提示することで質の高い経験となり、教室での学びがリアリティのあるものになります。

■教科におけるキャリア教育の 4 つの視点

「教室と社会をつなげる」ということは文部科学省の長田徹（おさだ とおる）氏も述べていました。長田氏は元石巻市立雄勝中学校の教諭で現在は文部科学省の初等中等教育局の生徒指導調査官です。長田氏は「キャリア教育は特別な活動ではなく、日常の授業ではぐくまれるべきもの」と語っています。そして、次の 4 つの視点を持って日々の授業を行っていくことが大事だと述べています。

一つ目は、《学校の学習内容が「働くこと」や「生きること」につながっている》と子どもたちに伝えることです。例えば、理科で「光の反射」について学ぶとき、その学習から通学路にあるカーブミラーを例に挙げ、日々の交通安全に活用されていると子

もたちが実感することで教室の学びが実社会とつながります。

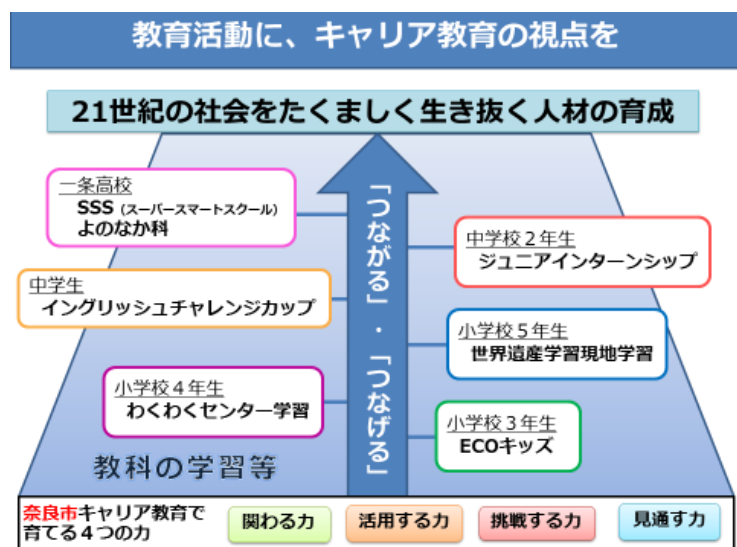
二つ目は、《学校の学び方が社会や生活の中で使える力になっている》と伝えることです。例えば、ペア学習や発表の場を多く設ける授業は、自分の考えを相手に正確に伝える力や相手の思いを正確に聞き取る力につながります。また、人と力を合わせてやり遂げることなど、こうした力が社会に出ても必要とされる大切な力であることを指導の中で子どもたちに伝えることが必要です。

三つ目は、《学校のルール、学習のルールは、社会に出た時のルールやマナーである》と伝えることです。時間を守る、身だしなみを整える、丁寧な言葉遣いをするといった学校のルールは実社会においても必要とされる態度につながります。ルールだから守らせるのではなく、自分が将来社会の中で生きていくために必要な力をつけていると子ども自身に感じさせることが大事です。

四つ目は、《体験学習を通して学校の学習が本当に社会で使えるかどうかを確認する》ことです。例えば、職場体験や修学旅行といった体験学習は「教室と社会」が直接つながる貴重な時間でもあります。教員自身が体験学習を「学びが直接社会とつながる場」と捉え、質の高い課題設定を行わなければなりません。

例えば、沖縄の修学旅行を実施するとしましょう。「平和の大切さを学ぶ」ために、語り部の話を聞いたり、ガマを見学したりして当時の沖縄戦の惨状を体感することは、意義のあることです。さらに、それにとどまらず、今の沖縄の現状はどうか、基地問題はどうか等、様々な側面から今の沖縄を捉えることもできます。もちろん、こうした問題は大人でも確たる答えを持っていません。修学旅行では答えが出なくても、多様な考え方があることに気付き、異なる価値観も尊重しながら同時に事実に基づいた議論を皆でする経験が大切です。そういう意味でも、子どもたちがより質の高い課題を設定して実際に現地に行って取り組むからこそ、自分なりの価値判断ができ、自分の考え方に根拠を持たせることができるのです。すると、沖縄の様々な問題について主体的に考えることができるようになるでしょう。その時が「教室」での学びから「体験活動」を通して「実社会」へとつながる時ではないでしょうか。

「教室と社会をつなぐ」視点を持つことは、本市が行っている様々な取組でも同じです。世界遺産学習やジュニアインターンシップなどもその学習が社会とつながっていることを意識して取り組んでほしいと思います。



■あらゆる教育活動を通して行われるキャリア教育

キャリア教育はあらゆる教育活動を通して行うものです。そして、長い時間をかけて、水が地面に染み込んでいくように、じっくりと行っていくものです。特に、体験学習は、「教室と社会」が直接つながる貴重な時間だと捉え、質の高い課題設定をし、子どもたちに付けさせたい力や気付かせたいことを明確にする必要があります。



今日お話した「教室と社会をつなぐ」ということは、まさに、教室での学びが実生活や自分の将来の中で問題を見つけ、解決していく力となっていくためのものです。次期学習指導要領のいう「学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力」や「生きて働く知識・技能」は、教室が社会とつながってこそ、培うことができます。そういう意識をもってこれからの社会を生き抜く子どもたちを、じっくり育てていってほしいと思います。